

がん検診

■ 胃がん検診（職域・地域）

今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため検診数が減少した。

職域検診では、X線撮影と内視鏡（施設検診のみ）による胃がん検診を行っている。X線による検診は、昨年度は51,947名であったが、今年度は41,586名に減少している。当施設で二次検診として内視鏡検査を行った216名から5例の胃がんが発見された。内視鏡による検診は、昨年度3,867名であったが、今年度は2,431名であり、胃がん発見は5例であった。

地域検診では、神奈川県下14市町村より委託を受けたが、3市町村が中止となったため、11市町村で検診車による検診を実施。7,845名が受診し、18例（男性14例、女性4例）の胃がんを発見した。

■ 大腸がん検診（職域・地域）

—免疫学的便潜血反応—

今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため検診数が減少した。

職域検診では前年度より2,395名少ない81,438名（男性57,172名、女性24,266名）が受診し、要精検率は5.1%であった。

—地域検診—

今年度、健診を受託した団体は15市町村であったが、3市町村が中止となった。9,021名（男性3,488名、女性5,533名）が受診し、要精検者数は590名で、その中から18例（男性11例、女性7例）の大腸がんが発見された。

■ 超音波検診

超音波を対象物に当ててその反響を画像化する検査方法であり、何回行っても人体にまったく害のない検査である。腹部の実質臓器（肝臓、脾臓、胆のうを含む胆道、脾臓、腎臓、および腹部大動脈など）を対象とした検査で、今年度は20,839名が受診した。各臓器の悪性腫瘍を疑う所見については精密検査が必要な「要精密検査」（全体の2.3%）として、専門医療機関へ紹介している。そのほか肝血管腫、脂肪肝、無症候性胆石、胆のうポリープ、大動脈の石灰化などが診断される。これらの有所見者については近医に紹介するほか、当協会では超音波外来においてフォローアップを行っている。

■ 肺がん検診（職域・地域）

胸部X線と喀痰細胞診（ハイリスク者のみ）による肺がんのスクリーニング。当協会専門医による二重読影を行い、可能であれば過去画像を参照し比較読影を行っている。

職域検診では、結果を依頼企業に返しているが、コロナ禍で4月の検診開始時期こそ遅れたが、ほぼ例年通りの実績であった。

地域検診では、県下の11自治体（横浜市を除く）から今年度の検診（二次読影）を受託したが、コロナ禍で2自治体では中止となり、外出自粛や受診自粛もあって例年の半数にとどまり、計2,466名（男性1,463名、女性2,003名）が受診し、6例の肺がんを発見した。これは前年度比で、受診者数では36%強、発見数では半数弱である。

地域検診の流れは、読影結果を医療機関へフィードバックし、要精検とされた例については各医療機関で最終判定をして、受診者に結果が伝達される。関係医療機関だけでなく関係自治体・医師会の担当部署を含めて、精度管理の向上に努めている。

厚木市では平成13(2001)年度から、大和市では平成20(2008)年度から当協会が二次読影に関与している。横浜市については市内居住の受診希望者を対象として、一次読影を当該受診機関で、二次読影は中区医師会で他医療機関の専門医と組んで読影し、結果を各医療機関に戻してそこで最終判定をする体制をとっている。

また、人間ドックや肺検診でCT検診受診希望者を対象に、MD-CTによる低線量撮影での肺がんCT検診を行っている。CT検診認定技師が一次チェックを行い、疑わしい例では薄切り撮影を追加し、その後医師2名（1名は呼吸器専門医または放射線診断専門医）が別個に二重読影を行っている。被ばくを低減しても（1mSv程度の低線量、通常施行されるCT検査の1/10程度の線量）、診断に耐えうる画像を作成する技術を用いている。コロナ禍中でCT検診受診者数は811名（男性、女性）と例年の2/3にとどまっており、今年度の肺がん発見はなかった。

■ 子宮がん検診（施設、地域・車検診）

施設での検診は診察（内診を含む）・細胞診による子宮頸部および体部のスクリーニング。希望によりHPV検査を行っている。問診と内診により発見される子宮筋腫や頸管ポリープなど、一般婦人科疾患の早期発見にも努め、適切に指示している。

車検診は、問診・細胞診による子宮頸部のスクリーニングを行っている。県内の5大学病院と県立がんセンターの婦人科腫瘍専門医からなる「子宮がん車検診実施検討会」を組織し、精度管理・向上に努めている。診察・細胞採取・診断は、同検討会の各大学病院婦人科医師が担当している。

今年度、検診を受託した自治体は18市町村で10,404名が受診。上皮内がんを含む2例の子宮頸がんを発見した。いずれにせよ、施設、地域、車検診ともに、コロナ禍のために受診者が大幅に減少した。

■ 乳がん検診（施設・地域）

施設での検診は年齢に応じて視触診及びマンモグラフィ・乳腺超音波検査のいずれかを実施、精密検査まで総合的に行っている。今年度は15,709名が受診し、38例のがんを発見している。例年の受診者は2万人前後で発見がんは50例前後なので、今年度はコロナ禍の影響が如実に出ているものと考えられた。

検診車による地域での検診は、国の指針に準拠したマンモグラフィ検診を実施。読影は「神奈川県乳がん集団検診協力医療機関連絡会」の指導にもとづき、検診マンモグラフィ読影認定医師が実施している。今年度検診を受託した自治体は18市町村で9,451名が受診、48例のがんを発見した。地域検診受診者も例年より3割弱減少していたが、発見がんは約1割増加した。また平成18(2006)年度より、“ピンクリボンかながわ”事務局としてNPO法人乳房健康研究会と共に、乳がんの早期発見・早期治療を目指し、乳がん検診受診率向上に努めている。

■ 神奈川からがんをなくす会・ACクラブ

会員制のがん検診組織。ACとはAnti Cancerの略。「神奈川から肺と胃のがんをなくす会」を前身として昭和51(1976)年に発足した。消化器（胃・大腸）がん・肺がん・乳がん・子宮がんの早期発見・治療を目指し、会員専用フロアとスタッフを配置し、経年変化を追ったきめ細かい対応を行っている。

令和2年(2020)年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延により全国でがん検診受診者数は大幅に減少し、検診で見つかるがんの手術症例の減少も明らかになっている。ACクラブの実績も全国と同様に前年度よりもすべてのがん検診において受診者数は減少している。

当協会は受診者が安心して検診を受けられるよう、感染防止対策を徹底している。また、次年度からは大腸内視鏡検査を再開し、症例数が増加している大腸がん検診の充実を図る。